

令和5年度文部科学省委託事業 体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト
「過疎地に学ぶ。暮らしの知恵にふれる交流体験事業」(特定非営利法人 日本余暇会)

試行・検証等のテーマ

『過疎地に学ぶ。人生を豊かにする生き抜くチカラ、非認知能力の向上』

背景・課題

社会の変化に伴い、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。一方、子どもの健やかな成長には豊かな心を育むことが不可欠であり、多様な交流体験機会、中でも自然体験活動の充実が重要であることは熟知のことである。こうした中、自然と共にある暮らしに必要なのは「地域の絆」であり、体験から得た「知恵」である。そこで、本事業では異文化の生活交流体験を通して、子どもの『非認知能力の向上』に寄与することを目的とした。

事業のねらい

昨今、快適便利な生活による地域の絆や体験の機会減少はじめ、コロナ禍も相俟って子どもの遊びのスタイルも集団から個、多世代から単世代へと変化している。不自由不便な環境下にて異学年の集団の中で生活をおくる越境体験を通して、葛藤を乗り越え、意欲や協調性、自己肯定感などの醸成につなげることで子どものwell-beingに向かう力を身につけることを目指した。

事業内容

※事業報告、事業評価の詳細については別紙「成果報告書／子どもが体験してつくった！暮らしの知恵手帖」を参照

<実施にかかる体制>

NPO法人日本余暇会が主体となり山古志農泊推進協議会と連携してプログラム造成を行った。一方、事業評価については文化学園大学/安永教授とともに質問紙を作成、評価を依頼した。

<テーマに基づいた試行、検証等の方法>

子どもたちへの事前/事後調査及び、フォローアップ調査としてアンケートを実施。子どもたちの心理的・行動的側面に対する交流体験事業への参加の効果について検討した。また、受入先の地元協力者へもアンケートを実施、受入地域にとって事業がどのようなことをもたらすかを検証した。

<活動の内容>

○実施期間：2023年12月25日(月)～29日(金)

○実施場所：新潟県長岡市山古志の各施設

○参加者属性、人数：小学生4～6年生、12名

※内訳の詳細は「成果報告書」参照

○具体的なプログラム内容：伝統文化体験・食体験、雪国のあそび体験、地元との交流体験を実施

※詳細は「成果報告書」参照



成果

事前-事後アンケートの結果から、交流体験事業への参加は、子供たちの物事に取り組む意欲、物事への興味・関心、仲間と強調して取り組む力や姿勢などの非認知能力や生きる力の向上に寄与することが明らかとなった。また、交流体験事業を受け入れる側の人々の心身の健康に対しても恩恵をもたらす可能性が示された。
なお、詳細は別紙「成果報告書」参照
https://yoka.or.jp/home/news_release/news_20240319

今後の展開

過疎地において、このような意図した取り組みが子どもたちへの効果が確認されたことや、地方創生や高齢者の健康寿命の延伸という観点においても事業が寄与する可能性が認められた。以上のことから、本事業の「自走化」および、他地区での横展開を模索していきたいと思う。
(自走化に向けては地元団体および、旅行会社との協議を進行中)